

第1回中心市街地活性化勉強会 報告

日 時 平成21年5月15日(金) 19:30～21:00
場 所 小田原箱根商工会議所 Bホール
内 容 中心市街地商業活性化アドバイザー佐谷氏の進行により進められた。

まず佐谷氏より出席者へ本勉強会についての概要が説明されるとともに、意見交換時のお願いとして、出た意見に対して反対をせず一つの意見と受け止めて欲しい旨話がされた。

今回は参加者全員に一人ずつ順番で、①自己紹介とともに「こんなまちになりたい」という意見②中心市街地活性化は何故必要か・・・について発表をいただいた。

今後は活性化向かうには人が集うことが全てのスタートであるがそのためにはどうしたらよいか、心地良く集ってもらうにはどうしたら良いか・・・を意見交換し、11月頃にはある程度具体的なものに繋げていく。

よって今後は月に2回程度勉強会を開催。次回以降は原則第2・4金曜日に開催。直近では5/29(19:30～)、6/12(19:30～)、6/26(19:00～)。6/26については丸亀商店街の古川理事長を講師に講演会を行うこととなった。

<出席者の意見>

①自己紹介ならびに「こんなまちになりたい」

- A =狭い地域で生活が完結できると便利
- B =(まちづくりには)早く手を打たないといけないと痛感している。歴史等の資産を活かしながら「新たに住みたい」「体験したい」といわれるような町にしたい。
- C =自分が何をしたいかというよりは「みんなは何をしたいのか」を知りたい。以前はシティモールで商売をしていた。郊外での商売経験を活かして自分は何ができるのか。
- D =小田原城の本丸を建て替えたい。城の設計図が残っているお城は数少なく貴重。
- E =小田原は東京の衛星都市のひとつ。使い方を考えないとすべて東京に流出してしまう。2050年の人口減少時代になっても人口を維持(増)できるように。他の街と比べたときに小田原は何があるのか。衛星のひとつとして輝けるようなまちになりたい。小田原は資産や地の利があるが20～30年前に比べて子供が減っているように見える。今後は各都市間で人の奪い合いが始まる。子育て世代が集まる街になりたい。
- F =交流人口をどう増やしたら良いのか。小田原に住みたいという人は多いが、具体的にここが良いと教えてあげられるものがない。小田原ならではのブランドを打ち出したいが現在は明確ではない。鮮明にする方法があるはず。打ち出すべき。そういうものができあがると良い。

G =人が集う場があれば皆外出するのではないか。小田原市が掲げる3大事業に期待している。ハードも大事だがソフトも大事。

H =安心・安全で商売がうまく行くと理想だが企業も人口も減少してしまっている。隣町の開成町は伸びている。小田原で持っているポテンシャルをどう伸ばすか。外からの人にどう入ってもらえるのか。個々の企業努力がはつきり出ている。小田原市内では各業種の均衡が15%ずつぐらいの割合になり突出するものがない。このような状況の街は稀。(他の街では何かの業種が突出していることが多い)

I =小田原の人口は増えないがポテンシャルとしては他の街に劣っていない。小田原は新幹線停車駅で土地が高く人口も増えない。都心への通勤においては茨城の土浦や千葉県の柏も変わらないが、そちらに行ってしまう。小田原は土地が沢山あるのに市街化区域が少ない。地震が来なければ最高の場所。これだけ魅力があるのに発揮されない中途半端さがある。小田原城以外は離れてしまう。ハードとしては弱い。箱根には誘客では敵わないが、暮らしやすさ(利便性)を打ち出せばよい。JRや小田急(等)の駅が多数ある。その辺を活かして行けば人口減少を防げるのではないか。地下街においては他所とは違った開発をしたらどうか。

J =市内には自費出版をされている方が多い。(ある意味)変わっている人が多い。「小田原らしさ」というのが人の要素が大きいのでは。たとえばおせっかいオバチャンみたいな、うるさい反面馴染むと心地良いような・・・そんな雰囲気のある街になりたい。人の係わりは大きな要素になる。

K =小田原市内の工場の工場長は2年ぐらいで変わってしまうが、住みやすいということで、市内に住まう人が多い。適度に自然があり東京に近いことが利点。

L =団体や商店街が同じ目標に向かうことができない。緑を多くしよう。緑と水をもう一度大事にすべき。水と酸素がなければ人間は生きていくことができない。全国でも木を大事にしながら中心市街地の活性で掲げる街は少ない。ちょっとしたスペースがあれば木を植えるなりしてできることから始めたい。

佐谷=(M氏の意見を受けて)この勉強会と同日にガーデンシティの講演会を行った内容について補足。①小田原は中世最大の城郭都市であり存在価値を持っている②水と緑の防災都市というポテンシャルを小田原は持っている(緑は防火になり水は災害後に必要になる)民間ひとりひとりがやっついていかないといけない・・・この内容は小田原を考えるひとつの切り口にしても良いのではないか。中心市街地活性は商業に重心がおかれがちであるが、どこかの商店会の勉強ではなく広い視点で話を少し広げながら勉強会を進められたら良い

②中心市街地活性化はなぜ必要か

- A = 高齢になると行動範囲が狭くなる。中心市街地の狭い中ですべてが収まるようなコンパクトシティになれば。高齢化社会に向けて街を集約する必要がある。
- B = 国はやる気のある地域に補助をしている。予算があるうちに(基本計画を申請して)つぎこんでやるべき
- C = 出店当時のシティモールには人通りが無く、色々な策を実行して現在に至っている。(逆に駅前には殆ど行かなかった) 中心市街地は、外からお客さんが娯楽や飲食で訪れた時の入り口であることから体外的な役割をしているので重要。生活者としては中心市街地・川東地区が両核となるのが望ましい。
- D = 中心市街地は生活圏であるため活性化しないと困る。人が集うものがそろっていれば中の人も外の人も心地良い。そのために何をすべきかを早く決めて実行すべき。今やらないと永遠にとりかかれない。
- E = 中心市街地は「人と人が出会う場所」であり「身の回りに無いものがある」そして住居もその中にあることも大事。一例は大阪なんばの戎橋や東京代官山のヒルサイドテラス。商いをしながらその場所に住まわないと安全面が低下してしまう。
- F = インフラをどう使いこなすのかが大事。中心市街地の空洞化にならないように。
- G = 「小田原駅」がまちの柱とっていたが、小田原市内には駅がいくつもあり、そこには人が集っている。各駅を核にしてそれぞれが連携して活かすことによって街は活性化するのはではないか。
- H = (一市民として)昔、小田原駅前へ給料日に食事に出かけたりお正月に一張羅を買いに行くことが楽しみだった。賑やかで物が揃っていて人が集る場としての中心市街地。また、ふるさととして記憶に残るようなものであってほしい。街の活性化が財政に繋がるともっと良い
- I = 小田原には良い店はあるけれど個性のある店が少なく、通勤者と通学者の街になっている。中心市街地には歴史・老舗・小田原ブランドになるもの(何でも)を絶対に残して欲しい。(100年経っても変わらないようなもの)
- J = 小田原市の上下水道等インフラ整備の関係もあり住居地の拡大は難しいだろう。ある程度集約しないと財政が破綻してしまう恐れがあるのでコンパクトシティに向かわざるを得ないのではないか。中心市街地ではインフラに取り組んでほしい。

K =小田原市内には多くの駅がある。今特に中心市街地活性化の例では開成駅。マンションができ、富士フィルムの新しい工場も誘致、学校も新たに創立したりしている。(典型的な近代的都市の様を見せている)。小田急が核になって発展。大きな資本小田原駅に限ってはJRの駅ビルをもっと大きくしてそこを中心に広がり配せば周辺の商店にも好影響をみせるのではないか。一体感ある地下街にすれば・・・西口・市役所方面へも伸ばしたら各商店への立ち寄りもあるのではないか。

L =街中に住居と商業が一緒になればいけない。どちらかに偏っても街はおかしくなっていく。まちづくりは従来の文化(長年蓄積してきたもの)の中でやっていかなくてはならない。

以上

<当日出席者> *順不同・敬称略

秋葉勝彦、石田一夫、岩瀬照子、釵持悟、櫻井泰行、佐藤慎一、中戸川洋、平井義人、古川孝昭、古川達高、丸田茂晴、譲原彰、